

学校体育のためのニュースポーツ種目の開発

横山茜理^{*}, 川西正志^{**}, 北村尚浩^{**}

Development of a 'New Sport' for school physical education

Akari YOKOYAMA^{*}, Masashi KAWANISHI^{**}, Takahiro KITAMURA^{**}

Abstract

The purpose of this study was to develop a *New Sport* for use in physical education at schools. *New Sports* are defined as: 1) sports that were recently created either in Japan or abroad, 2) sports that have long been played in other countries but only recently became popular in Japan, or 3) sports created by simplifying the rules or equipment of existing and established sports (Ministry of International Trade and Industry, 1990).

Based on the curriculum guidelines for junior and senior high schools, we focused on basketball, a sport in which skill levels vary markedly among individuals, and simplified its rules to create a potential new sport. Following consideration of the characteristics of the sport, we held a game in which players wore tags on their waists. The game was assessed by third-year students majoring in physical education. Based on the opinions obtained from this initial assessment, two new rules were added in addition to the use of tags: 1) defensive players are not allowed to enter the restricted area, and 2) inside the restricted area, offensive players must release a shot within three seconds. After incorporating these changes, a second assessment was conducted by first-year students majoring in physical education. Based on this assessment, the rules were finalized as follows:

- 1) Players are to wear tags on both the left and right sides of the waist, and if a defensive player takes the tag of an offensive player, it is considered as a stolen ball and results in a turnover.
- 2) Defensive players may not enter the trapezoidal restricted area.
- 3) Inside the restricted area, offensive players must release a shot within 3 seconds.
- 4) Other basic rules will follow those for regular basketball.

This *New Sport* was named '*New basketball*,' and was implemented in physical education classes at a senior high school to verify its effectiveness. The results of a questionnaire survey conducted after classes indicated that this *New Sport* reduced negative attitudes toward basketball among girls and enabled them to actively participate in classes. However, adequate effects were not observed in boys.

KEY WORDS : New Sports, physical education, high school

緒言

2006年に改定されたスポーツ振興基本計画（文部科学省，2006）では、「スポーツの振興を通じた子どもの体力向上方策」が新たに主要な課題の一つとして掲げられ，その基盤的施策として学校

体育の充実を図ることなどが求められている。学校体育は，生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎を培うものと位置づけられ，体育の授業や運動部活動を通じて，運動やスポーツに親しむ態度を獲得する機会として重要な役割を担っている。

さらに，2008年1月の中央教育審議会答申を受

^{*}鹿屋体育大学大学院体育学研究科

^{**}鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター

けて改定された中学校の学習指導要領（文部科学省，2008）では，保健体育の年間事業時間数が現行の90時間から105時間に増加されており，学校体育を通じた身体教育の重要性が再認識されつつある。また，高等学校学習指導要領（文部科学省，2004）にも保健体育の目標の一つとして「生涯を通じて継続的に運動ができる資質や能力を育てる」と掲げられており，学校体育はより一層の充実に向けて，転換期を迎えている。

このような動きの中，これまで以上に体育の授業に工夫が求められているが，学習指導要領に準拠しつつ，生徒の運動やスポーツに対する積極的な取組を促すための配慮が必要である。そのためひとつの手段として，学校体育でのニュースポーツの活用に着目した。ニュースポーツとは，国内外を問わず最近生まれたスポーツ，諸外国で古くから行われてきたが，最近になってわが国で普及してきたスポーツ，既存のスポーツ，成熟したスポーツのルールなどを簡略化したスポーツを包含したものと定義されている（通産省，1990）。また，技術の習得が容易ですぐにゲームを楽しむことができる，筋力や持久力の差がそのまま競技力に反映されることはなく，年齢・性別を問わず誰でも活動できる，従来の競技スポーツとは異なってルールに柔軟性を持たせ，楽しみを追求する，の3点が一般的特徴と魅力（久保，2000）とされる。一方，「ニュースポーツ」とは，従来の種目を分類するためのものではなく，「スポーツの楽しみ方・捉え方」といった概念的な言葉であるとの指摘も見られる。いずれにせよ，ルールや技術の習得が容易で誰でも気軽に取り組むことができるニュースポーツは，生徒の運動嫌いや苦手意識を抑制するという効果（高瀬，2001）とともに，スポーツへの社会化や体育・スポーツの持つ価値観の再認識など，さまざまな教育的効果も報告されている（笹瀬ら，2005；田中，2007；野々宮，1998；村上ら，2004）。

このような体力や技能レベルに関係なく活動に取り組むことができるニュースポーツを学校体育

に活用することで，先述した教育的効果だけでなく，体育の授業を通して身体活動やスポーツの楽しさや喜びを味わう機会を提供することも期待される。そこで本研究では，学校体育のためのニュースポーツを開発することを目的とした。

方 法

まず，中学校，高等学校の学習指導要領から，対象とする種目を検討した。その際に，個人の技術や体力の差が顕著であるような種目を選択するよう考慮した。

次に，選択した種目の競技特性を検討し，特に初心者にとって困難に感じられると思われる点について既存のルールを修正，簡略化した。その後，体育専攻学生による2回のアセスメントを実施し，それを元に最終的なルールを決定した。

さらに，高等学校の授業で実際に行い，生徒による評価を得た。

結果及び考察

1) 種目の検討とニュースポーツの考案

先行研究でも指摘されているように，ニュースポーツには体育が苦手な人も積極的に学べ，生涯スポーツへの動機づけ・活用性の高さなどの効果が期待される。そこで，既存のスポーツのルールを簡略化しリードアップとなるような種目を考案することとした。学校体育の単元の中でも球技は，得意な者と不得意な者のスキルの差が顕著に現れていると考える。特にバスケットボールは，「球技のなかでも「難しい」教材であるとか「指導しにくい」教材であると言われていたことも事実であり特に女子生徒の場合は，授業が進むにつれて敬遠する傾向がある」との指摘（荒木ら，1980）に見られるように，技術を習得する上での課題も多い（依田，2004；中村，2003）。これらのことを踏まえ，本研究では，小・中・高等学校で行われるバスケットボールを採用した。

バスケットボールは、それぞれ5人ずつのプレーヤーからなる2チームによってプレーされる。1チームが攻撃するバスケットを相手チームのバスケットいい、防御するバスケットを自チームのバスケットという。ゲームの勝敗は、競技時間が終了した時点で得点の多いチームを勝ちとする（日本バスケットボール協会, 2008）。また、ボールは手で扱わなければならない、ボールを持ったまま移動することはできない。原則的には、相手に対する身体接触（体の触れ合い）を起こしてはならない。走る（ラン）・跳ぶ（ジャンプ）・投げる（スロー）といった基本的な運動要素と、ボールハンドリングなど各技能が刻一刻と変化の中で適切なスキル（オープンスキル）が要求される。チームゲームであり、組織力を活かして自分を上回る相手を撃ち破ることができる。などが特徴とされる（西尾・加藤, 2007）。しかしながら、身体接触に限ってはネット種目と違い攻防区域を決められていないため、有効な身体接触が多く起こることも特徴といえる。

これらの競技特性を踏まえ、球技が苦手な者や初心者の積極的な参加を促し、競技スキル取得のためのルールを簡略化を検討した。まず、スピードのある動きの中で相手が保持するボールを奪取しやすくするため、プレーヤーは腰にタグを着用し、ボールを保持するプレーヤーのタグを取ることでボールを奪ったことと同様に攻守交替とすることとした（写真1, 写真2）。



写真1 タグを着用したゲーム



写真2 タグを着用したゲーム

こうすることで、タグラグビーやフラッグフットボールのように、ボールがなかなか取れないという苦手意識が取り除かれ、積極的な参加を促すことができると考えた。また、特定のプレーヤーがボールを保持し続けるとタグが取られやすくなるため、小刻みにパスを出すようになると予測した。さらに、タグを使うことで接触プレーが軽減され、ゲームに参加する積極性を促し、前向きな取組が期待された。パスが小刻みによく周ることと、積極的な取組を促すことで参加者全員の技術力向上が期待できると考えられる。さらには、チーム内での協力が生まれ、協調性を高めることも期待できる。

2) アセスメント

第1回目のアセスメントとして2007年1月15日にタグを使ったゲームを体育専攻の大学3年生(28名)に実施した。体育を得意とする者によるアセスメントを行うことで、従来のバスケットボールとの相違点や、簡略化に際してのルール上の確認が期待された。

その結果、従来のバスケットボールとは違い「ボールに触れる回数が増えた」、「運動量が増えた」などの意見があった。これらのアセスメントで得られた意見を踏まえ、新たなルールを加えた。すなわち、シュートを打ちやすくするために、台形の制限区域内にはディフェンスが入れないようにした（図1）。

シュートができる空間を確保することで、オフエ

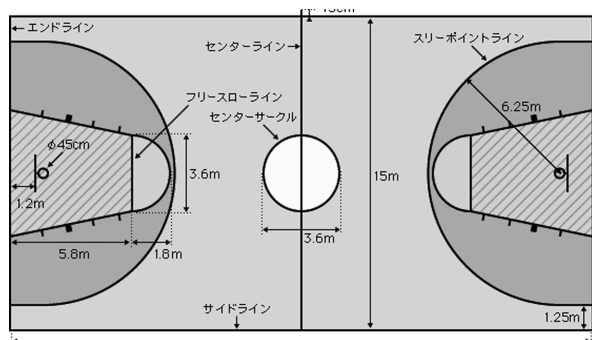


図1 コートと制限区域 (斜線部)

ンス側の心理的プレッシャーを軽減しシュートが打ちやすくなると考えられる。とりわけ、苦手意識が強い生徒にとってはシュートの機会を増やすことにつながる。ただし、制限区域内からは3秒以内にシュートを打たなくてはならないという時間的制約を設け、ゲームの流れが途切れないよう配慮した。

これらの変更の後、第2回目のアセスメントを2007年5月16日に体育専攻の大学1年生(44名)に実施し、最終的に次のような種目を考案し、(表1)ニューバスケットボールと命名した。

表1. ニューバスケットのルール

- ・基本ルールはバスケットボールに準じる。
- ・プレーヤーは腰の両側にタグを着用する
- ・タグを取られると攻守交替
- ・攻守が変わるときは、スローインからゲームを再開する
- ・ディフェンス・プレーヤーは制限区域には入れない
- ・オフェンス・プレーヤーは、制限区域内からは3秒以内にシュートを打たなければならない

プレーヤーは腰の左右にタグを着用し、タグを奪取することでボールを奪取したと見なすこととした。すなわち、ボール保持者がタグを取られた時点で攻守交替となり、サイドラインからのスローインでゲームを再開する。さらに、オフェンスのプレーヤーは、台形の制限区域内には立ち入れないこととした。一方、オフェンスは制限区域内からは3秒以内にシュートを放たなければならない。その他の基本的なルールは従来のバスケットボ

ールに準じる。

3) 体育授業導入の実際

開発したニューバスケットボールを高等学校の体育の授業に導入し、生徒たちの反応を見た。札幌市の私立Y高校に協力を依頼し、普通科一般コースの生徒男女90名(表2)を対象に2007年6月4日から2007年6月29日にかけて行われた、バスケットボールの単元で実施した。

表2. サンプルの属性

n=90	n	%	n	%	
・性別	・バスケットボールの経験				
	男子	49	54.4	全く経験なし	5 5.60
・学年	女子	41	45.6	授業のみ	67 74.4
	1年生	35	38.9	クラブ・部活動	11 12.2
・日常的なスポーツ活動	2年生	50	55.6	N.A.	7 7.80
	3年生	5	5.60	実施	19 21.1
				非実施	64 71.1
			N.A.	7 7.80	

バスケットボールの単元導入時にニューバスケットボールによる授業を行い、単元終了時に質問紙を用いて、ニューバスケットボールとバスケットボールの比較を生徒に尋ねた。各項目について、「1:まったくそう思わない」から、「5:非常にそう思う」までの5段階評定順にそれぞれ1から5までの得点を与え間隔尺度を構成するものと仮定して平均値を求めた。生徒に対しては調査の内容と目的を口頭で説明し、同意を得た。

全体として、バスケットボールと比べて概ね肯定的に捉えているようである(表3)。

「皆で参加できる」(3.50)、「運動量が多い」(3.45)、「チームで協力してできた」(3.33)、「ボールに触れることが多い」(3.24)など、積極的な取り組みを表す項目で比較的高い値を示し「ディフェンスしやすかった」(3.07)、「オフェンスしやすかった」(3.10)という技術的な側面を表す項目で低い値を示した。男女別に見てみると、全体的に男子よりも女子で高い値を示し「皆で参加できる」「チームで協力してできた」「攻守交替がわ

表3. バスケットボールとの比較

	全 体			男 子			女 子			t
	N	MEAN	S.D.	N	MEAN	S.D.	N	MEAN	S.D.	
より簡単に感じた	72	3.14	0.91	34	2.91	0.93	38	3.34	0.85	2.05*
ルールが単純	71	3.18	0.92	33	3.06	0.93	38	3.29	0.90	1.05
安全にプレーできた	72	3.22	1.02	34	3.06	0.92	38	3.37	1.10	1.29
シュートチャンスが多い	70	3.16	1.00	33	2.97	0.88	37	3.32	1.08	1.51
ボールに触れることが多い	70	3.24	0.94	34	3.03	0.76	36	3.44	1.05	1.90
シュートを積極的に打てた	71	3.17	1.01	34	2.88	0.88	37	3.43	1.07	2.38*
運動量が多い	71	3.45	0.89	33	3.30	0.81	38	3.58	0.95	1.31
ディフェンスしやすかった	72	3.07	0.84	34	2.82	0.72	38	3.29	0.90	2.42*
オフェンスしやすかった	72	3.10	0.86	34	2.88	0.81	38	3.29	0.87	2.05*
ボールやタグが取りやすかった	72	3.15	0.87	34	3.00	0.78	38	3.29	0.93	1.44
安心してシュートが打てた	71	3.11	0.92	34	2.91	0.83	37	3.30	0.97	1.79
新しい発見がある	72	3.19	0.91	34	3.03	0.90	38	3.34	0.91	1.46
チームで協力してできた	70	3.33	0.97	34	2.88	0.77	36	3.75	0.97	4.14***
攻守交替がわかりやすい	72	3.19	0.85	34	2.91	0.75	38	3.45	0.86	2.82*
皆で参加できる	72	3.50	1.07	34	3.03	0.87	38	3.92	1.08	3.89***

* p < 0.05 ** p < 0.01 ***p < 0.001

かりやすい」「シュートを積極的に打てた」「ボールやタグが取りやすかった」「オフェンスしやすかった」「ディフェンスしやすかった」の7項目で男女間に有意な差が認められた。つまり、ルールを簡略化したニューバスケットボールを行うことで、女子では男子に比べて積極的な取り組みが促されたと考えることができる。さらに、技術面においてもバスケットボールと比較して肯定的に捉えており、ルールを簡略化することによる期待された効果が得られたと考えてよいだろう。一方、男子においては、「ディフェンスしやすかった」(2.82)、「オフェンスしやすかった」(2.88)、「シュートを積極的に打てた」(2.88)、の項目からもわかるように特に技術的な面での評価が低くなった。これは対象者が高校生であり、従来のバスケットボールのゲームに対する慣れが影響したのではないかと推察される。

結 語

本研究は、学校体育に向けたニュースポーツを開発することを目的として進めてきた。そのためバスケットボールの競技特性を検討し、初心者や球技が苦手な者の積極的な授業参加を促すために、タグを着用してゲームを行うニューバスケットボールを開発した。

ニューバスケットボールを高等学校の生徒に実施したところ、女子に対してバスケットボールに対する苦手意識を軽減し、積極的な授業参加を促すことが明らかになった。一方で、男子に対しては十分な効果は認められなかった。

これらのことから、学校体育へのニュースポーツ導入の際は、対象者の特性に十分に配慮した上で、競技性やルールの柔軟性に関する対応が必要だと言える。そうすることで、ニュースポーツを使った体育の授業には、より多くの生徒たちの積極的な授業参加を促し、運動することの「楽しさ」

を学ぶことができる。また、このような体育の授業を通して先行研究で指摘されているように、身体活動やスポーツへの社会化、体育・スポーツの持つ価値観の再認識などを促すこともできるであろう。

大学教育実践研究第13号 pp79-84.

- 15) 田中希 (2007) 学校体育プログラムへのニュースポーツ種目の可能性. 鹿屋体育大学平成18年度卒業論文.

文 献

- 1) 荒木豊・井芹武二郎 (1980) <学校体育叢書> バスケットボールの指導. ベースボール・マガジン社. p.10
- 2) 依田由紀子 (2004) 体ほぐしの運動 バスケットボール編 - 個人的技能 -. 体育科教育. 第52巻 第14号 pp74-75
- 3) 藤谷かおる・出村慎一・北林保・畑田雄也・岩田秀樹・宗倉啓・岡出美則 (2004) 高等学校における「良い体育の授業」の構成要因及びその評価項目内容の適切性: 教師と生徒間の比較. 体育学研究 第49巻 第5号 pp471-482.
- 4) 久保和之・道用亘・吉澤洋二・守能信次 (2000) 大学体育におけるニュースポーツ選択者の特性. 中京大学体育学論叢 第41巻 第2号 pp71-79.
- 5) 松本耕二 (2002) 生涯スポーツとニュースポーツ. 川西正志・野川春夫 編 生涯スポーツ実践論 生涯スポーツを学ぶ人たちに . pp175-181
- 6) 文部科学省 (2006) スポーツ振興基本計画.
- 7) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領.
- 8) 文部科学省 (2004) 高等学校学習指導要領.
- 9) 日本バスケットボール協会 (2007) バスケットボール競技規則. pp7-11
- 10) 中村恭之 (2003) 教材を工夫した侵入型ゲームの授業. 体育科教育 第51巻 12号 pp38-41
- 11) 西尾末広・加藤敏弘 (2003) バスケットボールの競技特性. 大修館書店編集. アクティブスポーツ 2003. p.102.
- 11) PALS 研究プロジェクト班 鹿屋体育大学 (2001) 「高齢者のニュースポーツの運動量とイメージに関する研究」 実験・調査報告書.
- 12) 笹瀬雅史・五十嵐寿早・竹田隆一 (2005) 大学教育におけるレクリエーション・スポーツ授業の実践と評価 生涯スポーツの観点からの検討 . 山形大学教育実践研究 第14号 pp43-52.
- 13) 高瀬博 (2001) ニュースポーツに関する一考察 () 母体スポーツによる分類とその特徴 . 関東学園大学紀要 Liberal Arts 第9集 pp41-52.
- 14) 竹田隆一・飯沢朋・黒須憲 (2004) オーストラリアのモディファイドスポーツについての研究. 山形